読売歌壇

小池　光　選

私にもあんた位の娘がいるの車椅子押す我に言う母　稲敷市　寺田　明美

【評】かなしい歌だ。母は娘がいたことを覚えているが、その娘がいまじぶんの乗る車椅子を押している人間であることがわからない。老いの究極のすがた。春の日差しの中で。

老残の声聞かすことなく消えしちあきなおみに拍手送らん　ひたちなか市　新山　英輔

【評】突然消えたちあきなおみ。残された歌はいまも人のこころに響いて止まない。こういう世の中の去り方もある。去ることで永遠に残るのである。

どの人も「ありがとうございました」と降りてゆく芽吹きの中のわが町のバス　横浜市　皆上　洋子

【評】高齢の方々だろう。バスはなによりの大事な足。みんなお礼を言って降りてゆく。芽吹きの中、というところがいい。

母の愛せし曽野綾子より名を貰い生きて来た我その死を惜しむ　千葉市　佐藤　綾子

二月堂火の粉の下の人混みに一瞬父を、亡き父を見た　大阪市　上平　幸恵

赴任地のはじめての朝顔洗うときに聞きにし鶯の声　三原市　上脇　立哉

春が来た春が来たよとパステルの色がささやく街を歩けば　東京都　浜田　綾子

ばあちゃんの唐揚げ食べて頑張るね　孫は今日から病院実習　西条市　山本美知子

どなたかな賽銭箱に千円札わたしは十円毎日だから　京都市　岩渕　慶子

フラフープぶんぶん回す原っぱに夕陽が落ちた昭和のひと日　伊賀市　福沢　義男

栗木　京子　選

「ブツギリネ」異国の青年調理場で手わたしの鱈生き生き捌く　羽咋市　森田外志枝

【評】国によって食べる魚の種類や調理法が異なる。この青年には鱈のぶつ切りは新鮮な体験だったのかもしれないが今ではすっかり慣れた様子。臨場感あふれる場面である。

ステージに五人並んだ桃太郎スマホで消してわが孫だけに　熊本市　甲賀　亨子

【評】主役が五人もいる発表会。とりあえずそのままスマホで撮り、あとから修正機能を使って孫の姿だけ残す。「スマホで消して」がユーモラスであり、少々冷酷でもある。

めぐりくる時の速さと緩やかさ枝垂桜は地までとどかぬ　福生市　二瓶　利明

【評】枝垂桜が風に揺れながら咲いている。そこに時間の緩急の流れが見えるのだ。枝先が地に届いていないところに余情が漂う。

いくたびも枝うつりしてパン屑を啄む野の鳥私にあらずや　龍ヶ崎市　日野林佐智子

闇バイト敬語で脅す少年よ戦なき今をなぜ楽しめぬ　大阪市　道下美智子

柔らかな孫のほっぺを撫でし朝アラート鳴りて飛翔体墜つ　大洲市　城戸　通宗

海のない国では国境越えて来る北海の魚地中海の塩　オランダ　宮沢　洋子

磯笛や小島の入江なぎ渡り祖母の舟まつ七つの我は　志摩市　岡山　花野

老妻がもてなす手料理にあきたらず激辛店に行きたがる孫　深谷市　村田　利雄

パーティーで大酒飲みでほがらかな私を見せてお別れとした　北九州市　添田　修

俵　万智　選

運動会で探したように髭面のわが子を探すマラソンコース　静岡市　柴田　和彦

【評】何歳になっても、我が子を探す気持ちは、変わらない。運動会とマラソンという具体的な場面の重ね合わせが効いている。

飛行機の胃袋あたりに腰を掛け目を閉じて待っている機内食　横浜市　友常　甘酢

【評】意表をつく見立てだが、飛行機が鳥だとしたら、ちょうどそんな感じだろうか。胃袋あたりの自分の胃袋を思うときの、マトリョーシカのような感じも面白い。

ぽっかりと心に穴が空いたなら猫が通れる穴だよきっと　東京都　葉山　あも

【評】落ちこんでいる人へ、猫をおすすめしている場面と読んだ。ふさいでくれるわけではないのが、いかにも猫らしい。

小さき花びらに宿りて春来たるいぬふぐりの青ゆきやなぎの白　浜松市　久野　茂樹

この部屋の空気を歌わせるように揺れつつ上るお香の煙　平塚市　小林真希子

けふの日をモーツァルト日和と呼ばう海のみなもの返照まぶし　市原市　井原　茂明

きみがいま見ている夢を覗きたいページをめくるような寝返り　東京都　畑　冴菜

逝きしこと人づてに聞く寂しさを君に伝える術はもうない　南あわじ市　山田　咲月

三振はバッターボックスに立てた君の眩しい記録、ぼくには　川崎市　船山　登

エスプレッソにむくむくミルク泡立ててあなたの来ない午後を飲み干す　新発田市　加藤じゃすみん

黒瀬　珂瀾　選

肺がんで死んだ阿呆の墓までを躑躅の蜜を吸いながらゆく　市原市　十条　坂

【評】この「阿呆」には、「どうして先に死んだんだ」という哀惜と友情が込められています。一緒にツツジの蜜を吸ったような幼馴染ではないかと想像し、心を打たれました。

サクサクとスマホ片手に町歩く孫との旅は無駄が足りない　横浜市　杉本　恭子

【評】マップアプリのおかげで道に迷うこともなくなりました。でも、目的地に行きつくだけの旅も物足りない。途中でうろうろした時に見える町の風景もまた愛おしいのです。

捨て難きものの一つは抑留を生き延びし亡父の黒き飯盒　南丹市　中川　文和

【評】モノには記憶が宿ります。父のシベリア抑留を語る飯盒は、大切な歴史の証人。捨てたりせず、地元の博物館等にご相談を…。

勾玉の赤きペンダント胸に揺れ八十路の今も母のぬくもり　枚方市　鍵山奈美江

市役所の午後のベンチのあかるさは春の別れを折りたたんでる　宇部市　常田　瑛子

ひとり居の寒き夜更けの病床にあるはずのなき地虫鳴くなり　天草市　野口久仁子

塩気なき汁に慣るれど独房に我が血圧は下がることなし　仙台市　長岡　義宏

生きゐるが手柄と説きし老いの言葉聴きつつおのづと胸熱くなる　八王子市　関山　正雄

名もなき者の力によつて「国家」ありつば九郎の死にふとさう思ふ　奈良県　吉川　孝志

男児より縄をば借りて跳ぶ十回いづこより来しこの若やぎは　宇都宮市　福田　滋子

◇投稿規定◇　はがき１枚に未発表の１作品。住所、氏名（ふりがな）、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、にほんばし蔵前郵便局留、読売歌（俳）壇、○○先生（希望選者名）係または読売新聞オンラインから　◇毎週月曜日に掲載　右の影絵はさくらもち